

カリブ文学試論——パピアメント語小説の位置

西 成彦

1. 「多言語の海」としてのカリブ海

そもそもコロンブスの到来以前、カリブ海沿岸地域では、マヤ系・アラワク系の諸語が話されていたと思われるが、その後はスペイン語（+ラテン語）を皮切りに、西洋列強の言語が次々に流れこむ。オランダ語の流入は、西インド会社の設立（1621）まで遡ることができ、同じ17世紀には、島嶼部（アンチル諸島＝西インド諸島）に、フランス語や英語が流れこんでいくことにもなる。そして、アフリカから労働力として運びこまれた奴隷たちのあいだでアフリカ系言語の喪失にともない、ヨーロッパ語ベースのクレオール諸語が誕生し、それがそのまま今日のカリブ海域における言語地図へと引き継がれている。

たとえば、コロンビアの作家、ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』 *Cien años de soledad*（1967）のなかに、《一日じゅうインディオの姉弟にへばりついて、グアヒロ語はともかく、スペイン語を絶対にしゃべろうとしなかった》（34頁）というホセ・アルカディオとアマランタの兄妹が登場する。グアヒロ語〔＝ワユ語のこと〕とは、アラワク系先住民の言語で、コロンビア北東部のカリブ海に突き出たグアヒーラ半島からベネズエラにかけて今も使われている少数言語だ。小説の舞台となるマコンドは、カリブ海に面した港町リオ・アーチャから、やや奥地に入ったあたりと設定されているから、スペイン系の住民とインディオ系の住民の接触は濃厚だった。

そして、この一帯には、カリブ海の島々で奴隷身分から解放された黒人が次第に住みつくようになる。ホセ・アルカディオの曾々孫と思しきアウレリアーノは、サンスクリットの勉強を始めたかと思えば、近くに住む黒人たちと《二、三週間で覚え込んだややこしいパピアメント語で話の相手をした》（285頁）という。パピアメント語は、グアヒーラ半島から百キロほど東にあるアルーバ島を含み、ボネール島、キュラソー（クラサオ）島からなる通称「ABC諸島」で話されているポルトガル語ベースのクレオール語だ。17世紀にポルトガル領だったブラジルの東端を一旦征服したオランダ人が、そこから撤退後、ポルトガル語でコミュニケーションをとる黒人奴隷（さらには、同じくポルトガル語を話すユダヤ教徒）とともに移り住んだ結果、スペイン語からも大きく影響を受けながら成立した言語だ。それは、同時に英語やオランダ語やフランス語語彙系のクレオール語との接触の痕跡をもとどめており、マコンドに海の香りは立ちこめていなくても、カリブ海沿岸地域ならではの色彩が濃厚なのだ。

じつは同じガルシア＝マルケスの中篇「無垢なエレンディラと無情な祖母の信じがたい悲惨の物語」 *La increíble y triste historia de la cándida Eréndira y su abuela desalmada*（1972）には、主人公のエレンディラが心を許すウリセスという名前の少年が登場する。ダイヤモンドの入ったオレンジで大儲けをしたよそ者（オランダ人）の父親と、グアヒロ族の母親のあいだに生まれ、

父親とはオランダ語、母親とはグラヒロ語で話す。しかも、両親はスペイン語で意思疎通をはかっているという複雑な言語環境のなかで育ち、家のなかではウリセス少年だけが、トライリンガルなのである。そんなウリセスがエレンディアを追いかけて、アルーパ行きの出る港町までたどり着くあたりは、父親がオランダ系であったことを考えると、何らかの符合を感じさせる。

カリブ海は、奴隷交易の海として広く知られたが、ヨーロッパで戦争が持ち上がるたびに、白人たちも出自をカムフラージュさせながら、ちゃっかり動かせる資産は移動させつつ地域間を動いたし、ハイチ革命以降、奴隷解放が進むにつれて、黒人の自発的な移動も徐々に活発化した。19世紀末、パナマ運河の開鑿に要した労働力の供給に奴隷解放が大きく預かって力があつた。

また、「ABC諸島」は、1863年に奴隷が解放されると、対岸のベネズエラとのつながりも強めた。カラカスの西にあるベネズエラの港町プエルト・カベージョのサン・ミジャン地区に受けつがれる「太鼓歌」を徹底的に論じた石橋純さんの研究によれば、サン・ミジャン地区の《創建者のプロフィールとして、住民が語るのは、オランダ領の島クラサオの出身者である》(88頁)とのことである。19世紀後半になって、オランダ領の島々とコロンビアやベネズエラとの関係が急速に深まったことは、スペイン語話者(およびスペイン語での会話)に向けたパピアメント語の入門書 *Guía para los españoles hablar papiamentu y viceversa* (1876) が刊行されたのを見ても分かる。



1) カリブ海地域図 (ガブリエル・アンチオーブ著『ニグロ、ダンス、抵抗』人文書院より)

そこで、ここでは、オランダ領アンチルの島々に生まれたパピアメント語で、いま小説が書かれ、「南北アメリカ文学史」のなかに一石を投じようとしているという現実にも多少なりとも光をあててみたいと思う。

2. キュラソー島の簡単な歴史

キュラソー島を「発見」したヨーロッパ人は、アロンソ・デ・オヘーダと言われるスペイン人で、先住民は完全に征服される（サント・ドミンゴ島に連行されたとも言われる）が、島はそのまま放置されていた。ところが、1568年、ハプスブルク家の宗教弾圧に抵抗して、立ち上ったネーデルラント一帯は、1581年、スペインの影響から逃れ、それがオランダの興りとなる。オランダはまずアジア進出を狙って、1602年に東インド会社を作り、1609年には平戸に商館を開くまでに至るのだが、他方、大西洋地域にも進出したオランダが最初に本格的な進出に乗り出したのは、ポルトガル領ブラジルの東端部に位置するペルナンブコだった。すでに触れたように、1654年にはペルナンブコからの撤退を余儀なくされるのだが、撤退したオランダ人（そのなかにユダヤ教徒や黒人奴隷も含まれたのだ）の多くは、すでに1634年以降、オランダの支配下に置かれていたキュラソー島に定着を図るようになる（そこには1674年、ユダヤ教徒のためのシナゴグまでもが建設され、西半球ではオランダ統治時代のレシーフェのそれに次ぐ二番目の古さであった。現存するシナゴグは1730年に建造された）。その後、オランダが、まず手に入れていたニュー・アムステルダムと交換で、現在のスリナムを英国から獲得するのは、1667年のことだ。このように、オランダのカリブ及び南米地域への影響力が強まるのは、17世紀後半のことだった。

そもそもオランダのカリブ海地域への進出は、英国と同様に海賊船（私掠船）の暗躍から始まったのだが、しだいに奴隷交易にも深くコミットするようになり、いわゆる植民地経営を二の次にしてまで奴隷交易に集中し、キュラソー島はその中継地点のひとつとして繁栄することになるのである。

そんななか、17世紀から18世紀のカリブ世界は、奴隷制に基礎を置く単一農業と、農産物の交易で莫大な富を蓄積し、世界経済の心臓部分とさえ言われるに至るが、1789年のフランス革命は、この地域に新時代の声を吹きこむことになる。「人権宣言」をはじめとする思想は、瞬間に奴隷制社会のなかに大きな反響を呼び、各地で「奴隷解放」の声が上がる。

キュラソー島もその例に洩れず、1795年に奴隷の反乱があり、今回紹介しようという小説『奴隷と主人』*Katibu di Shon* (1988) は、まさにこの反乱で命を失うことになる黒人奴隷と、子どものころ、その幼友達だった白人の青年という二人の若者のモノローグを交差させた小説だ。

その後、ラテンアメリカ諸国の独立を経て、大陸部から順々に奴隷解放が進み、英領では1833年から34年にかけて、フランス領でも1848年に奴隷解放が実現して、オランダ政府が奴隷解放に踏み切るのは、1863年、要するに米国の内戦（＝南北戦争）の最中のことだった。

そして、この時期以降、カリブ海における人口移動が活発化するようになるのだが、フランス領グアドループ出身のマリーズ・コンデの長篇『悪辣な生』*La vie scélérate* (1987、管啓次郎訳の邦題は『生命の樹』)には、同じグアドループ出身の主人公がパナマで、他のカリブ海出身

者と接触するさまが、さらりと描かれる。

グアドループやマルチニックの人間を相手にも、ジャマイカ人やトリニダード人以上につきあおうとするわけではなくて、まるで自分の内なる沈黙の中で自分専用により上げた言語以外には言葉を知らないようだった。(18頁)

パナマでは英語とスペイン語が「リング・フランカ」であったはずだが、カリブ海出身者はそれぞれのクレオール言語を交錯させて用いながら用を足していたのだろう。そのなかにパピアメント語も混じていたはずである。

あるいは現地の新聞に載った死亡広告のなかにも、オランダ領アンチルの出身者の名前がいつ拳がってもおかしくなかった。

「ジョシュア・スティール、バルバドス出身、登録番号 23646、クレブラにおける爆発のため死亡。」

「サミュエル・トーマス、モンセラート出身、登録番号 456185、サトゥンにおける爆発事故のため死亡」

「ジョゼフ・ジャン・ジョゼフ、ハイチ出身、登録番号 565481、チャグレスにて生き埋め」
(15頁)

そうこうするうちに、1914年にパナマ運河は開通するのだが、ちょうど同じ年、コロンビアの国境に近いベネズエラのマラカイボ低地で石油が発見される。ロイヤル・ダッチ石油が採掘利権を占めていたこともあって、その後、キュラソー島に石油精製工場ができ、まさにキュラソー島は、一躍、石油の輸出拠点へと変貌するのである。

しかし、オランダによる植民地統治は苛酷さを失わず、1952年に自治権が付与される（インドネシアのオランダからの独立の影響も大きかった）まで、一時は娯楽や儀礼用の太鼓の使用が禁止されるなど、元奴隷たちの文化に市民権が与えられるのは、まだまだ後になってのことなのである（同じく英領のトリニダード島でも、1880年代以降、太鼓が危険視されて禁止され、それがスチール・パンの発明を生んだというのは有名な話だ）。ベネズエラのプエルト・カベージョに島の太鼓たたきが流れていったとしてもおかしくない歴史的な背景があった。

そうするなかで、1969年に、パピアメント語の地位向上を求めて暴動が発生する。元スペイン領や元英領、あるいはフランス領の島々でも、各種クレオール語が話されてはいたが、公用語とそこから派生したクレオール語の二重言語使用にさほど障害はなかったのに対し、「ABC諸島」では、オランダ語とパピアメント語というルーツが異なる二言語のダイグロシヤ状況があり、教育現場でのオランダ語の強要は、島民から大きな反発を招いたのだ。カリブ海のクレオール言語のなかで、パピアメント語の地位が群を抜いて高まっていったのには、理由があったのである。その後、「ABC諸島」へは、北米からの観光客も訪れるようになって（とくにアルーバ島）、いまやパピアメント語、オランダ語、スペイン語、英語が、日常的に話されるというのが現状のようだが、初等教育の言語としてのパピアメント語は定着しつつある。

なお、政治的には、「ABC諸島」と呼ばれた島々のうち、アルーバとキュラソーは、オランダ王国の構成国のひとつとして独立（アンチル諸島のシント・マールテンも同様）、ボネール島は、アンチル諸島のシント・ユースタチウス島、サバ島とともに、現時点ではなおオランダの一部である。

3. パピアメント語文学としての『奴隷と主人』

ところで、『奴隷と主人』の作者であるカレル・デ・ハセス（1950年生れ）は、薬剤師が本業だが、アンチル改革党の政治家でもあり、パピアメント語に土台を置いたキュラソーの未来を構想する「ナショナリスト」だ。そして、「キュラソー・ナショナリスト」であるなら、たとえば1795年の暴動を国民的記憶のなかに位置づけようとするのは、当然の判断だったのだろう。しかも、反乱軍に関わって、監禁されて最終的に自害して果てる黒人の記憶と、その幼なじみであったにもかかわらず、その友人を見殺しにするしかなかった白人の記憶とに等分の想いをこめるとするのは、彼なりのバランス感覚であり、政治的な判断であったと言っていい。

小説は6章構成だが、奇数章は奴隷反乱者のルイス、偶数章は白人領主の息子であるウェルムーの語りからなっている。

まず、第1章は、独房に入れられたルイスの決意から始まる。パピアメント語の響きを分かっていたかのために、原文にスペイン語訳を添えて、そこに和訳をつけておく。以下は第1章の冒頭部分である。

(Pap.) Ata mi aki. Benta den bodega skur di kashot. Mi so. (p. 34)

(Esp.) Estoy aquí, aventado en la bodega oscura del 'cachot'. 'Só' estoy.

(Jap.) おれはここ、牢屋の薄暗い地下室に放りこまれている。おれひとり。

※ 'cachot' はフランス語の「独房」から。'só' はポルトガル語の「ひとりで」。

(Pap.) Mara ku kadena na man i pia, komo si fuera mi por a hui di akifo.

(Esp.) Amarrado con cadena de los manos y pies, como si pudiera huir de aquí.

(Jap.) 手も足も鎖につながれて、そうしないと逃げてしまいかねないとでもいうみたい。

(Pap.) Ku kada moveshon ku mi asi, herunan ta korta mi.

(Esp.) Con cada movimiento que hago, 'hernu' me corta.

(Jap.) ちょっとでも体を動かすと、また食いこんでくる。

※ 'hernu' は、オランダ語の「再開する」。

このように始まった第1章は、ルイスが獄死をも恐れまいと決意するところで終わる。

つづいて第2章では、領主階級に生れたウェルムーが、奴隷蜂起によって、それまでの安定した世界観が揺らぎ始めるのをまざまざと見せつけられて、そうした事態を前にした述懐である。

そして、第3章からは、しばらく、蜂起以前の過去、要するにルイスとウェルムーがそれぞれに少年時代をふり返る形になっている。奴隷か主人かという立場を離れて仲睦まじくできた少年時代のつながりが、この二人を完全な敵対には追いこまないで済んでいるのである。

奴隷に生れたおれだけど、そんなおれだつて小さな子ども時代の夢のような世界を堪能した。

Ounke m'a nase katibu, mi tambe a gosa di e mundu enkantá di mucha chikí. (p. 64)

【Aunque nació como esclavo, yo también gozé del mundo encantado de los muchachos chiquitos.】

その世界では、ウェルムーの旦那がおれの奴隷で、おれがやつの主人ってことも一度や二度じゃなかった。

Ta den e mundu aki asta de bes en kuando Shon Welmu tabata mi katibu i ami su shon.

【Era en el mundo en que hasta de vez en cuando el Sr. Welmu era mi esclavo y yo su amo.】

そして、そんな過去、ルイスとウェルムーがともにアニタという奴隷の女性に恋をした思い出が語られるのだ。そして、この第3章と対をなすような第4章では、ウェルムーがルイスを出しぬいてまで、アニタと肉体関係を持ってしまった思い出が、苦い思い出として語られる。

そして、第5章では、処刑の時を待つばかりとなったルイスのところに、ウェルムーが訪ねてくる。

やつは、友達のようにおれと話した。自分の気持ちを話して、二人で過ごした少年時代を懐かしそうに。

El a papia ku mi manera un amigo, kontá mi su sintimentunan, rekòrdá e hubentut ku nos a pasa huntu. . (p. 94)

【Él habló conmigo a manera de un amigo, me contó sus sentimientos, recordó la juventud que pasábamos junto.】

おれは罪を告白する子どもの声に耳を傾ける親父みたいな気持ちだった。

M'a sinti mi manera un tata ku ta skucha un yu konfesá su pikánan.

【Me sentía como un papá que escucha un 'yu' confesando sus pecados.】

※ 'yu' は、パピアメント特有の表現で「子ども」。フレンチ・クレオール の 'yich' に相当。
これはスペイン語の 'hijo' で説明されることが多い。）

こうして二人は和解し、まさに思い残すことをなくしたルイスは処刑の時間を待たずに自決する。

そして、最終章は、後悔だらけの人生をふり返りながら、ウェルムーが島の未来を思い描くところで終わるのだが、じつは気がついてみるとアニタは妊娠していて、その子が誰の子かが

分らない。そして月満ちて生れた子は真っ黒な子だった。ルイスの子だった。しかし、アニタは出産の苦しみを耐えきれずに死ぬ。

小説というよりも戯曲（それも典型的な悲劇）に仕立てたくなるような内容で、じっさいにこの作品は、2013年、アムステルダムでオペラとして上演された。もちろんパピアメント語である。

4. まとめ

この小説には、英語との対訳版（2012）が存在するので、私はそれを参考にして何とか読みこなしたのだが、まだまだ自力でパピアメント語からいきなり訳すだけの自信が私にはない。

じつは、私は南アのイディッシュ文学を追いかけていて、ラフミエル・フェルドマンという作家に出会ったのだが、その短篇「ヤンとピート」（執筆年代は1930年代後半）を訳したことがある。そこでも白人の主人公と、幼なじみで、あたかも双子のようにして育った黒人の少年との友情と、その破綻が描かれている。支配階級と使用人階級という異なる階級に属していても、そうした階級差を超えた友情や愛情が育まれることが、とくに子どもにはめずらしくない。奴隷制（的な）社会を背景とした物語のなかで、「小さな子ども時代の夢のような世界」は一種の神話を形作っている。ところが、現実はそのような「夢」を「夢」に終わらせる。奴隷（的な立場にある人びと）が反乱に立ちあがったとき、まさに「夢」のなかでの友情は、幻想であったことが明らかになるのである。「ヤンとピート」においては、白人のヤンが生れたばかりの仔牛をなぶり殺してしまっただけで、その罪をピートがかぶってくれたにもかかわらず、その後、交流を失った二人が、ある黒人暴動の日に、ひとり警官、ひとり暴徒の一人として再会するという物語である。結局、「和解」は訪れず、後味の悪いまま話は終わる。その点、『奴隷と主人』には、無理やりにもルイスとウェルムーのあいだの「和解」が描かれているのが、まさにこの小説の「国民文学」たる所以だろう。ヘーゲル流の「主人と奴隷の弁証法」によるそれではなく、「主人と奴隷の友愛」を仮構した上での「国民化」nation-buildingがそこでは模索されているのだ。

しかも、そこでは人種間性交がもたらす「ハイブリッド化」の幻想にもまた「国民化」の物語のなかでの重要な役割が与えられている。人種の境界を越えた三角関係は、ひとり生き残った白人の青年が、幼なじみだった黒人と、その恋人とのあいだに生れた子どもを、あたかもみずからの子であるかのように育てなければならないところで終わっている。

しかも、それは白人の言語というよりは、むしろ奴隷階級のなかで創造され、そして奴隷解放後も継承されて、「国語」としての地位につくまでに至ったパピアメント語で語られる。それがキュラソーを代表する白人作家、ハセスの選んだ道だった。

フェルドマンの小説は、アパルトヘイト体制が確立する以前の南アにおける人種抗争の問題を、あくまでも白人の言語で描きつつ、白人が引き受けなければならない倫理的な問いを敢えて立てる試みだった。それは、アフリカーンス語で書かれてもよかったし、場合によっては、主人公の友人であるピートの母語であったに違いないソト語（バンツー系の言語で、1994年以降は南アの「国語」のひとつ）を使って書かれてもよかった。ただ、フェルドマンは、南アの土地に根づくことを悲願のひとつとしていた東欧系ユダヤ人の言語であるイディッシュ語でそ

れを書いたのである。しかし、ハセスの場合には、パピアメント語で書くということが、まずその政治的判断の原点にあることがらであった。

カリブ海地域の現代文学のなかで、パピアメント語をはじめとするクレオール諸語が果たしうる役割については、未来における可能性も含めて、あだや疎かにすべきではない。それこそ、『百年の孤独』に対して、「ABC諸島」の作家がパピアメント語で「書き返す」writing back可能性を私たちが単なる憶測で否定したりしてはならないのだ。あるいはウリセスとエレンディラの物語が、アルーバにおける「国民文学」の祖型を形作らないという保証もない。

いまだその文学史が確立しているのではないとしても、本稿を、カリブ海地域における「クレオール語による文字文学」なる可能性を考える上でのきっかけとしたい。



最後に引くのは、ノーベル賞詩人でもあるデレク・ウォルコット（セント・ルシア出身）の長編詩「帆船フライト号」The Schooner Flightの一部だ。ウォルコットの詩には、セント・ルシアでいまだ広く話されているフレンチ・クレオールの詩句が時おり姿をあらわすのだが、彼は基本的には英語詩人である。しかし、その詩の背後には、可能態としての「クレオール語による文字文学」がひそんでいる。

おれはモノス*からナッソー**までの島々を知っている
 海の緑の色をした目を持つ鉄錆色の頭の水夫だが
 みんなは「シャビーン」と呼ぶ。それは俗語***で
 赤っぽい肌をした黒人をあらわす。その「シャビーン」であるおれは
 帝国のスラムが天国だった時代を目にしていた
 おれはまさにその赤っぽい肌をした黒人で、海を愛する
 植民地の教育もしっかりと受けた
 おれのなかには、オランダ人と黒人と英国人がいる
 そしておれはだれでもないか、それともひとりでネイションだ

* トリニダード島の沖合にある小島

** ニュー・プロヴィデンス島にあるバハマの首都

*** 英語を「公用語」とするセント・ルシアで今でも日常的に話されている
 フレンチ・クレオールのこと

I know these islands from Monos to Nassau,
 a rusty head sailor with sea-green eyes
 that they nicknamed Shabine, the patois for
 any red nigger, and I, Shabine, saw
 when these slums of empire was paradise.
 I'm just a red nigger who love the sea,
 I had a sound colonial education,
 I have Dutch, nigger, and English in me,

and either I'm nobody, or I'm a nation.

セント・ルシアで「帝国」の教育を受け、最後にはその「帝国」の言語で詩を書きながら「ひとりでネイション」を宣言してみせたウォルコットと、「キュラソーというネイション」の構築のためにパピアメント語小説を書いてしまったハセス。

みずからの「雑種性」を礎に「ネイション」を最小単位で構成するウォルコット（大英帝国による「教育」の賜物としてのみずからの言語能力を酷使する）と、歴史的に対立関係にあった白人と黒人の個々の経験を、ひとりの女性を媒介にして接合し、両人種の「和解」に結びつけることで「レイシズム」から自由な「ネイション」を構想するハセス（その時にパピアメント語という混成言語が補助的な役割を果たす）。

こうした両極をしっかりと見据えることが、カリブ地域の文学研究の幅を広げ、発展させることにつながるのだと思う。

[参考文献]

(Anonymous), *Guia Para Los Españoles Hablar Papiamentu Y Viceversa: Para Que Los De Curazao Puedan Hablar Español (Spanish Edition)*, Nabu Press, 2010

コンデ, マリーズ『生命の樹』管啓次郎訳, 平凡社, 1998

フェルドマン, ラフミエル「ヤンとピート」西成彦訳, 『立命館文学』635号, 立命館文学会, 2014

ガルシア＝マルケス, G.『エレンディラ』鼓直・木村榮一訳, ちくま文庫, 1988

ガルシア＝マルケス, G.『百年の孤独』鼓直訳, 新潮社, 1972

石橋純『太鼓歌に耳をかせ』松籟社, 2006

Rojer, Olga E. & Joseph O. Aimone, *Founding Fictions of the Dutch Carribean: Carel de Haseth's Slave and Master (Katibu di Shon) — A Dual-Language Edition*, Peter Lang, 2012

Walcott, Derek, *Collected Poems 1948-1984*, Faber & Faber, 1992

カレル・デ・ハセス (1950-) は、下記サイトを参照。

<http://www.indeknipscheer.com/opera-katibu-di-shon-gaat-op-1-juli-2013-in-premiere/>

オペラ版『奴隷と主人』(2013)については、下記サイトを参照。

<http://www.operamagazine.nl/recensies/operarecensie/23043/eerste-papiamentu-opera-in-premiere/>

